NTR
好きな人の前で
種付けされる女達

村井知恵の場合

窓を開けて下にいる彼氏に手をふって他愛ない会話をする。
それだけなら普通の事だけど今の私は普通の状況じゃない。
彼氏と談笑している後ろで男がぶっといオチンポを私のオマンコを犯しているから。
この後ろの男は強引に私を犯し続け、最初は嫌だったのについにはこのオチンポに
逆らえなくなってしまった。

彼には後ろめたい思いがありながらも、普段からオチンポの事を考えるのを
やめられない私……
「えっ!?　な、なんでもないよ……っ!」
下にいる彼が私を気遣った事を言ってくれる。ほんとに彼は優しいんだ。
でもそんな彼を見ながら私はオマンコを犯されている。

村井知恵の場合

（ねえ……今すっごくオマンコ気持ちよくなってるんだよ……？）
ぎこちない笑顔を彼に見せながらそんな事を呟いてしまう。
後ろの男のピストンが強くなってくる。もうすぐ私のオマンコの中に射精する合図だ。
「ふぅ……く……っ！」
喘ぎ声を押し殺しながら彼との会話を続けるのも背徳感があって快感を増幅されてる気がする。

ひとしきり会話し別れの挨拶をしようとした瞬間、一気に私の子宮内に濃い精液が充満した。
「っっっっっっっっっっっ」
声にもならない声を上げながら私は絶頂に達してしまった。
（ああイッてるぅ……ごめんね……あなたの前で寝取られてオマンコに射精されながらイッてるのお……っ！）
彼にイキ顔を晒しながら私はオチンポが抜かれたオマンコから精液をボトボトこぼして余韻に浸っている。
もう彼のチンポでは物足りない女になったって事なんだろうな……

菊川きららの場合
「あっ……あっ……もっとお……っ！」
思わず声が漏れちゃう。授業の最中、アタシは保健室でセックスしちゃってるわけ。
アタシのクラスは自習になっちゃって、それを利用して保健室にきたの。
まあ普通に気分が悪いって言って保健室に行き、こうやってヤルのはもう日常みたいになってるんだけど。
化学の教師がアタシにチンポを突き入れてくる。この先生のチンポと相性が良いのか
アタシは絶対イケるんだ。
付き合ってる彼氏のチンポじゃあんまりイケないんだよねぇ。悪いやつじゃないんだけど
不満っていうか。
誰もいない保健室にアタシ達の卑猥な音が充満するのが心地良く感じる。
ひとしきり楽しんでいると、誰かが保健室に入ってきた。
「っ……！？」
驚いてそっとカーテンを開けると、入ってきた人の正体は彼氏だった。
「な、なんで……？」
どうやら彼氏のクラスの偶然自習になってたらしくてアタシの事を聞きつけて
来たみたい。

菊川きららの場合

ヤバイ状況になっちゃったけどなんとか隠し通さないと。
「えっと……少し寝てれば大丈夫だからさ……も、もう戻っていいよ……？」
なんとか追い返そうとするけど彼氏は出ようとしてくれない。
しかもこんな状況なのに先生はアタシにチンポをズコズコ突くのをやめない。
今はやめるように先生に合図を送っているんだけど、先生はむしろ火が付いたように
ピストンを激しくしてくる。
「え？　ええ……だ、だいじょう……ひぐぅっ！？　……大丈夫だって、う……
ううぅん……っ」

カーテン一枚の向こうには彼氏がいるのに……こんなドキドキする現状になぜか
アタシも興奮してきてしまうの。
（こ、この状況の感度ヤバっ……！）
「は、はやく行ったほうが、いいよ……？　アタシ？　アタシも少し休んだらい、
イクから……さあ……っ」
ペニスがアタシの子宮内で大っきく膨れ上がり射精する準備を整える。
（こ、こんな状況で子宮内に出されたら……イッちゃう……イ、イッちゃうううう……っ！）
先生の精液がビュクビュク注がれ、アタシも彼氏にイキ顔を晒してしまう。
不思議な表情の彼氏をよそにアタシは絶頂を味わう。これすごいわ。
（彼氏の眼の前で他の男に射精されてイクの気持ちいいじゃん……）
またこれやろうかな……？

佐倉かなの場合

私は図書委員なので放課後はほとんど図書室で仕事をしています。
「あっ……はあぁぁ……っ」
私の嬌声が利用者がいない静かな図書室に広がっていく。
座っている私の下で上級生の男がペニスを私に突き刺しているんです。
つまりこんな所で私達はセックスをしていることになってます。
前に図書室に行く時に偶然廊下でセックスしている光景を見ちゃった事がありました。
あまりに衝撃で図書室で仕事をしている間もその事が頭から離れず気もそぞろで……
仕事が一段落した後、私は見てしまった淫靡な現場を思い出しながらオナニーを
してしまったんです。

そしてオナニーで絶頂した瞬間を偶然ある男子に目撃され写真を撮られてしまいました。
それが今私を犯している男子生徒です。彼は写真で私を脅し、セックスを強要する毎日。
彼氏がいるにも関わらず私は黙って従うしかなく、そして今でもその関係は続いています。
この男は彼氏とは違ってあらゆる体位で私を犯してきました。
本来この状況は苦しいはずなんです。しかし……なぜかこの男とのセックスを
楽しみにしている自分もいる……
少なくともこの男とのセックスでは今まで感じたことのない快楽を得られる
からでしょうか……

佐倉かなの場合

もう私の体はこの男のチンポなしには考えられないくらい調教されてしまったのかもしれません。

「んっくぅ……オ……オチンポ気持ちいいです……ああぁ……っ！」

いつしか私は卑猥な言葉も躊躇なく言ってしまうようになってるんですよね……

ガチャ、と扉が開く音に私達はビクっとし、誰が来たか確認すると……

「っ！？」

私の彼氏です。そういえばさっき図書室に行くとスマホに連絡がきたんだっけ。

「あ……し、仕事まだ終わって、ないから……っ」

セックス中を必死に隠しながら彼氏を追い返そうとする私。

（このままじゃ二股セックス見られちゃう……っ）

色々無い事を言いながら彼氏との会話を切り上げようしてるのにセックスピストンが激しくなる。

（さ、さすがに今は……今は……っ！）

男の体を触ってやめるよう促すが男は従うことなく、ついには私の膣内に盛大に射精してきました。

「はうっ……くうううううううううう……っ！」

抵抗も虚しく私は中出しされ、あろう事か彼氏に射精アクメを見られてしまいました……

前田陽子の場合

あまり人がいない公園で私と彼はデートの待ち合わせをよくしてる。単に彼が公園が好きって理由でね。
もうすぐ待ち合わせ時間。彼は待ち合わせているいつもの場所で待っているようだ。
私はというと……彼が見える所、近くの茂みで潜みながらオマンコに興じてたりする。
「そ、そんなに激しくするとバレちゃうよお……」
後ろから私の腰を豪快に持ち上げながらオマンコを虐めてくる男に向かって注意する。
しかし男は容赦してくれない。
私を犯してる男は同じ大学のサークル仲間だ。しかも付き合ってる彼もサークル仲間で
彼らは友人同士だったりする。
私が付き合ってるって知ってるにも関わらず、後ろの彼はサークルの部室内で
私を半ば犯してきた。
最初はレイプされたと思ってショックだったけど……彼は私の身体を喜ばせるのが
上手すぎたんだろう。
犯されながらも私は次第に快楽を貪るようになっていき、気がついたら彼の
チンポの虜になってしまってる。

前田陽子の場合

男らしい彼はアクロバティックな体位でオマンコするのが好きみたいで、私はしたこともないような姿勢でいつも絶頂した。
今だってこれからデートだってのに、彼は私を調教するように強引に犯してくる。
「はあ……はあ……あっ……」
待っている彼を見ながらオマンコを犯される……その背徳な感じが快感を増幅されているのかもしれない。
私はいつもより感度良く感じているようだ。
（ごめんね……今からデートなのにあなたの友人の人に子宮にいっぱい射精されちゃうの……っ）

付き合っている彼に申し訳ないと思いながらも私は今の快感を逃さないように股間に意識を集中している。
ドプドプ……
フル勃起した彼のチンポから白濁スープが私の膣を通って子宮に充満していく。
「あひいいっ……デート直前の彼の近くで中出し射精されてイクううううっ……っ！」
思わず待っている彼にも聞こえそうなくらいのイキ声をだして絶頂してしまった。
もちろん内股に精液を垂らしたままデートをした。彼に気づかれるかドキドキしながら。

野島冴子の場合
「も、もう少し静かに……」
デパートの試着室でボクは裸になってセックスに興じている。相手は学校で所属する水泳部のコーチだ。
でもって今は幼馴染の彼氏とデート中っていう状態だったりする。
非常にヤバイ状態だ。
偶然ボク達の姿を見たコーチがムラムラしたとかで彼に気づかれないように試着室に誘導されてしまった。
カーテンする外には彼がスマホを見ながらボクが着替えるのを待ちながら時々ボクに話しかけてくる。
「あ、あのさ……外で他のトコ見ててもいいよ？　ボクもうちょっとかかると思うからさ……」
まさか彼も試着室でセックスしてるなんて思ってないだろう。しかも他の男と……
コーチと関係を持つようになってもう長い。彼とのエッチはつまらないのも影響していたんだと思う。
強引なコーチのセックスはボクを大いに喜ばせてくれた。
今だってヤバイ状態なのにボクは興奮しているのがわかってしまう。

野島冴子の場合

時々ガタっという音が試着室からするのが気になるのか彼氏が聞いてくる。
「えっ!?　い、いや、着るのが大変なんだよね……ははは」
カーテンで顔だけ出しながら彼に言い訳するそばで、まるで彼氏に気づかせようとするかのようにコーチのチンポの突き入れが激しくなる。
「ひぐぅ……っ！」
思わず彼氏の前で変な声が出てしまい、彼は不思議そうな表情になる。
（ああ……すごい……この状況……も、もう言いたい……っ　彼にカーテン開けてバラしちゃいたくなる……っ！）

彼が真実を知ったらどんな表情をするんだろう。きっとその表情でボクはイッてしまうかもしれないなんて思う。
（くぅ……も、もうイク……っ！　彼の前でアヘ顔晒してイッちゃうよおおおお……っ！）
カーテン越しの彼の眼の前で私はビクビク身体を震わしながらイキ続ける。
中出しされた精子がドボドボと試着室の床にこぼれていくのをイキながら見ていた……もちろん彼は不思議な表情のままだ。
（はあ……ごめん、でもあなたのセックスじゃもう満足できないんだもんボク……しょうがないよね……）
ボクはあまり罪悪感がない感じで内心彼に謝り続けた

前川さおりの場合

夏祭りを彼氏と見物に来ているんだけど……
私達の近くで忍ぶようについてくる男がいる。私を調教している男で、なんと
私の学園の後輩だ。
今回夏祭りを彼に誘ったのは私なんだけど、この事を提案したのは後ろにいる
後輩だったりする。
年下で下級生にも関わらず私を快楽の底へ叩き落とすなんて世も末だ。
今もぴったり私の後ろを付いてくる。彼氏の前で私を調教するために。
「はう……っ!?」

花火を見ている私達がスキだらけなのをいいことに、私の浴衣の裾を捲る。後輩の
命令で下着は付けていない。
人だかりの中、後輩は大胆にも私の股間をむき出しにしてペニスを挿入させてきた。
「あうぅん……こ、こんなトコで……」
精一杯声を殺して呟くが、花火の音が大きいので彼には気づかれていない様子。
あまりにも非現実な状況にパニックになりながらも、私の心のどこかでは
興奮しているのが分かる。
（こんな所で、しかも彼氏がいるのに他の男とセックスしてアヘってるなんて……
とんだ変態だわ……っ）
自分自身の変態性を罵るが快感の波を止めることはできない。

前川さおりの場合

ドーン……！　ドーンっ！
綺麗で迫力のある大花火の音がこの空間に充満する。周囲の人は感動していたり、怖がったり。
私は彼氏の腕にしがみついている。彼はきっと花火にビックリしているからだと思ってるんだろうな。
（ごめんなさい……っ！　私い……オマンコいっぱい犯されて気持ちいいのお……すごく興奮してるのお……っ！）
花火が佳境になるひつれ、後輩のオチンポのペースが上がる。
「あひい……っ！　あひいん……っ！」
大きな花火の音と同時に私のアヘ声が放たれる。後ろの後輩は野獣のように興奮しているのが分かる。

ペニスが一段と大きくなって私に射精する合図を送る。
（ああクルう……孕ませ汁いっぱい……彼氏がいる横で私のオマンコに中出しい……オマンコイッちゃうう……っ！）
ビュクビュクっ……
盛大に私の中に出された精子が暴れまわる。
（イクイクイッちゃうううううううううううううううう……っ！　寝取られアクメイクうううんっ！）
彼氏がどうしたと聞くが、私は何も答えずただ身体を痙攣させて絶頂の余韻に浸っていた……

赤坂麗華の場合

「悠太、ちょっと手伝ってくれる？」
夕飯を作っている途中、私は同居している義理の弟に手伝うように促す。
兄弟でゲームをしている途中なのに、いいよと快く返事をする悠太の目がギラつくのが分かる。
私の旦那は不服そうな顔をしていたが、すぐに別のゲームを選んでいる。
「ん……そこよ……」
悠太は台所に立っている私の後ろにくっつきながらスカートをめくる。
下着は付けていない。
なぜならこれから必要なくなるから。

ここかい？　と聞く悠太にそうよ、素っ気なく私は答えた。そしてすぐに屹立したオチンポが私のオマンコに突き刺さる。
「っ……！」
眼の前にはゲームに興じている旦那……私達は気づかれないようにセックスを始めた。
ヘタクソな旦那と違って弟のほうはセックスが上手で、私は絶対にイカされる。
しかも何度も……
この味を知ったらもう関係を止めることなんてできない。女だもの。

赤坂麗華の場合

「も、もう少し激しくしてもいいわ……ああ、そうよ……っ」
私の言葉に悠太は若さに溢れたセックスを押し付けてくる。
パンパンと乾いた音が出るたびに旦那に気づかれる事を恐れながらも容赦なく
私達の腰がぶつかり合う。
（ああ……すごいぃ……オマンコが喜んでるわぁ……あなたぁ……あなたじゃ
できないオマンコいっぱいしてるのぉ……っ）
旦那に見せつけるように私達の激しいセックスが台所で行われているのに
旦那は気づいていないのが可笑しい。

「も、もうイッちゃうぅ……っ」
快感が絶頂まで上り詰めようとしてる事を悠太に告げると、悠太も勢いを増して
オチンポを突き入れる。
子宮口を強引に開きながらオチンポから精液が放出された。
「っっっっっっ……！」
女を孕ませる気満々な中出しに私は絶頂させられていく。
（あなたぁ……イクうぅ……イクわあああぁぁぁ……っっ！）
もし旦那が振り返ったら私のよだれを垂らしまくったアヘ顔に驚くだろう。
「またやりましょ……？」
義理の弟は期待を込めた目をしながら頷いた。

大西彩奈の場合

静まり返った寝室。旦那は毎日の仕事の疲れもあるのだろう。熟睡して起きそうもない。
「くぅ……んん……っ」
この静かな空間に私のくぐもった声が浸透していく。
妻であるところの私は今、この寝室で裸になって旦那以外の男のチンポを受け入れている。
相手の男はマンションのお隣さんだ。
独身で性を持て余している彼を私が誘惑したのだ。

誘惑した理由は単純で、私がただ単に欲求不満だったからにすぎない。
彼は抗うことなく私に乗ってきた。欲望のまま私を常に犯し続けている。
今も旦那が寝ている横で私のオマンコを刺激する。
まるで旦那に自分の所有物だと主張するように鬼気迫るセックスを披露していく。
（ああ……あなたぁ……今私、お隣さんのオチンポを咥えているのよ……すごく
気持ちいいのぉ……っ！）
旦那の寝顔を見ながら犯される私……考えれば考えるほど非現実すぎて興奮するのだ。

大西彩奈の場合

「も、もっとぉ……もっとオマンコ突いて……」
私のおねだりに若い彼は一気に力を入れて子宮口をゴツゴツ犯す。
「あっ……あっ……あっ……！」
小気味良い喘ぎ声が少しずつ響いて、いつ気づかれるかドキドキだ。
四つん這いになっているので汗がボトボト滴り落ちていく。
「あっ……も、もうイク……っ」

後ろから彼が出すぞ、と私に語りかけて一気にピストンを強くする。
「ああっ……あなたぁ……もうイクのぉ……オマンコイクうううううう……っ！」
ビュクっ！
ほとばしる精子が私を絶頂に引き連れていってくれた。
（はあぁ……目を見開いて見てあなたぁ……こ、これが私のオマンコ顔よ……
あなたのチンポじゃ絶対しない顔ぉ……）
旦那のチンポなど比べ物にならない彼のチンポはこれからもお気に入りだ。

間宮理沙の場合

「ああん……っ、も、もっと突き上げて……あ……っ！」
夕方に私は娘の家庭教師の子と情事に溺れている。
まだ大学生らしく若々しいセックスは私を大いに満足させてくれるのだ。
最初は彼のことは気にもしていなかったのだけれど、どうやら彼は私がタイプだったようで時節猛アタックをかけてきた。
いつしかその若さにあてらてた私は彼とセックスする事に喜びを得るようになってしまった。
「ほんとに君は私のオマンコの気持ちいいとこよく知ってるわ……最高よ」

甘ったるい年の差カップルのように身体を重ねている中、ふいに旦那が家の前にきているのが窓から見えた。
（え！？　ま、まだ帰る時間じゃないのに……っ！？）
旦那は窓ごしの私を見つけて帰りの挨拶をしてくる。私はできるだけ裸を隠すように窓から顔だけ出して話すようにする。
「ど、どうしたの今日は……？」
セックスがバレないよう努めて平静に聞くと、仕事先がメンテナンスかなんかで早あがりになったと言っている。

間宮理沙の場合

（冗談じゃないわよ……）
悪態をついていたら私の下から家庭教師の彼のチンポが勢いよく突き上がってきた。
「ひぎいい……っ　ま、待って……今は……っ！」
旦那と会話中にも関わらず空気を読まないように激しいセックス音が周囲に響く。
「あひい……え？　う、ううん、別になんでもない……そ、掃除中だったから……」
平静を装って旦那に言い訳する私だったが、その姿が可笑しいのだろう。彼は笑いながら
私を犯してくる。
彼のピストンがどんどん激しくなってくる。きっと彼もバレると危ないと
思っているからだろう。

「んんっくうう……は、激しいい……ああっ……！」
何やらお土産がどうとか旦那が言っているが私の肉体はオマンコに集中してしまっていた。
彼のチンポが一段とオマンコ内で膨らみ上がってくる。
（ああ、あのひとの前で射精されちゃうううう……っ！　イケナイ中出しオマンコで
イッちゃうううう……っ！）
旦那の会話を無視して私は射精され、そのままオーガズムに達してしまった。
もしかしたら旦那にアヘ顔をバッチリ見られたかも……などと考えながら
私はオマンコから垂れる精液を凝視していた。

イフ
見え人
パーキング